



放浪画家・秋山誠さんのご紹介

会員の小山田浩さんがお出合いになられた放浪画家の秋山誠さんです。心にジンと沁み添え書きでしたので、ご紹介いたします。

ちょうど桜の咲く春爛漫のころでした。末期のすい臓がんが元で妻はこの世を去りました。享年48歳でした。あれから16年、あつという間の歳月でした。天涯孤獨の身になった私は、世の無常を悲しみとしながらも、旅の空を住処とし、ただひたすら孤獨の中で生きています。勿論、彼女は今も私の心の中に在り、永遠の二人旅が続いています。今日ほどここで描こうかと迷っている、「この辺がいいわ」と彼女が私に語りかけてくれそうです。その場所を、たまたま肉体を持つ私が描いているだけなのかもしれません。この絵はそんな妻との共同作業のつもりで描きました。

正式な夫婦ではなかったのですが、彼女は医者の一入娘でありながら、ブランド物や貴金屬類などにも一切目もくれず、貧乏絵描きの私を一人前の画家にするために、身を粉にして妻の勤めを果たしてくれました。卒そような表情を決して表に出さず、常にニコニコしている彼女でした。20年近く一緒に暮らした中で、彼女の不機嫌な顔や、怒った顔は一度も見たこともないくらい心の優しい女でした。病気に気づいたときは既に末期の状態、入院して3日後にこの世を去りました。検査の途中のストレッチャーの上でニコニコと手を振る彼女の笑顔。「心配しないで」と彼女は言いたかったのでしょう、それが彼女の最後の笑顔でした。

私のような者にただ尽くすためにこの世に生まれ、そして死んで逝ったのかと思うと、余りにも彼女が不憫でならず、せめての供養と、彼女の生きた証をこの世に残してやりたいという一心で、そのために放浪の美食画家として生きてゆく決心もできました。稼ぐために描いた絵ではありません。裏に彼女の名も併記させていただき、一枚でも多くの方々の手元に渡るように頑張っています。以上のような事情で、正直なところ三日三晩何も食べられない厳しい状況のときもあるのですが、妻の薬の語りかけが私に勇気を与えてくれ、事実、私はそうしてこの16年を生き抜いてこれたような気がしています。妻の死の苦しみを思えば、私の苦勞など少しも苦にはなりません。人の死には何らかの意味があり、それに気づいてやれることこそ生きて行くものの使命だと思えば、私はむしろ今こそ本当の幸せだと気づくことができ、心から妻に感謝をしています。こんな男のために命を削り、そして尽くしてくれたことに対する愛情を思えば、それが人の生きてゆく意味であり人間として存在する本当の意味ではないかと信じています。

個展はやらないのですか？ とよく尋ねられますが、私はいわゆる「画家」として絵を売って生活してゆくという意味での「画家」にはならないつもりです。美食画家で結構という気持ちで生きています。売るために描く絵には人を感動させるような力はないものと確信しているからです。つまらない絵描きで一生を終えることの方がはるかに虚しく思えるからかもしれません。その意味で、私は今、心から幸せだと思っています。

市井の片隅にこのような夫婦もいたことを、この絵を通して何かの機会にでも時々思い出して戴ければ幸いです。そして、どうか気づいたときにでも、必ずがん検診に行かれることをお勧めします。それがあなたへの彼女からのメッセージです。

あなた自身の愛を成就させて下さい。その成就した愛を一人でも多くの方々に伝えてゆくこと、そのことのみが、人として生きる最大の目的ではないかと、妻を亡くしてみて悟ることができたような気がしています。一人前の立派な画家になることを夢み頑張ってきました。しかし、そんなことはどうでもよいことのような気がしています。画家になるという意味は、愛を成就させるための単なるプロセスに過ぎなかったのではないかと。ただ単に職業的なことを夢にみて生きねばならないと思うからこそ、そこに人生の虚しさが付きまとうのではないと思われま。故に、どのような夢を抱いて生きるかということはそれほど重要なことではないかもしれません。夢を実現させることも大切な生き方であることはいまでもないことなのですが、人生の成功者になろうとも、失敗してホームレスとなってこの世を彷徨うはめになろうとも、人生の虚しさという意味では、そう大した違いはないのかもしれない。だからこそ、あなた自身の愛を成就させ、そのことを人々に伝える生き方を目標にしてみてください（その目標に到達するための生きる手段としての職業の選択は当然重要なことなのですが）。そうすれば、人生はあなたにとって決して虚しいものではなくなるはずですが。生きるとは、つまりそういうことなのだ、自分で納得できさえすれば、それがつまり人生の完成なのだ、妻の死を契機にして感じることもできたのだと私は知ることができたような気がしています。この絵を通じて、そのことが一人でも多くの方々に伝われば、私は幸せであり、一応の人生の目標に到達できる喜びを得ることができたような気がしています。そのための旅であると願ってきました。と、同時に、妻はそのことを私に伝えるためにこの世に生まれ、そして旅立って逝ったのかもしれないと思うことで、彼女の生きた証しも少しは残してやれそうな気がしています。何はともあれ、愛の成就について語れる資格ができたという意味で・・・。画家という職業を通じて・・・

若い人たちへ
学びなさい、学びなさい、ただひたすら学びなさい。文学、芸術、哲学・・・何でもよい。それらは、生きてゆく上でほとんど何の役にも立たないのは確かです。それで食べて行けるという保障はないのだから。しかし、あなたがやがて年老いて余命いくばくもないと悟らされたとき、三度三度の食事よりもそれが重要だということに気づくはず。文学、芸術、哲学（宗教的なものも含めて）について、何一つ学んでこなかったことをあなたはきっと後悔するはず。だから学びなさい。資格を得るための学問ではなく、やがて年老いて死ぬのために。



本日はカンパのご協力ありがとうございました。皆様ひとりひとりのご協力の御蔭で約1000枚の絵をカンパにご協力下さった方々にお渡しすることができました。この旅を継続するための資金を皆様からのご協力によって賄うことの引き換えに、一人でも多くの方々に、画家としての私の絵をお持ち帰りいただければ幸いですとの趣旨に立て頑張ってきました。本来ならば、数千円でお渡しできる作品ではなく、個展などで発表する際には12万円以上の値をつける作品であることをまずはお伝えしておきたいです。単に絵を売っているわけではありません。カンパにご協力して下さった方々に対するお礼の気持ちとしてさしあげているものです。生前にはなにもしてやれなかった妻への感謝の気持ちを込めた作品であることも言い添えておきたいです。この一枚一枚の絵が、少しでも後世に残ることによって妻の生きた証しのようなものも少しは残してやれるだろうとの願いもこめています。やがてはその時期の訪れによって、私もこの世を去らねばならないときが来るのを避けて通るわけには参りません。そのとき、なにかの風の便りにでも、私がそういう状況になったことを聞かれることがあるとすれば、そのときは心から喜んで下さい。私が本当の意味でこの世に存在した証しを残せる足がかりになるでしょうから。「秋山という絵描きさんが亡くなったんだって。ひょっとしたらこの絵の価値もあるかもしれないわ」という会話が私には聞こえてきそうな気がします。1000枚分のそれぞれの家庭のそれぞれの会話の中で、そのような話の弾みきっかけとなれば幸いです。私の死によって、そういう会話が交わされるということこそ私の喜びにしたいと願っています。ほんのささやかでも、人々に喜びを与えることに携ってこの世を去って逝けるとしたら、これほど幸せなこととは思えないから。ご協力いただいたカンパに対するお礼としてこの絵には、そういう意味を含めたものということをご理解いただければ幸いです。いつの日にかこの場でめぐり逢えた事があなたにとって喜びとなるような、そんな絵描きでありたいと願っています。そして、あなたたちが幸せでありますように、どこかの旅の空の下で折っております。ありがとうございました。

秋山誠

圓塾 新たな出帆にあたって

お陰様で圓塾は栞さわの道玄の関連姉妹団体として発足し満九年を迎えました。今日まで活動を続けて来られたのも、ひとえに会員皆様方のご厚情によるものと心から感謝致しております。

さて、その圓塾が新年から装いも新たに生まれ変わり、出航いたします。

前述の通り、栞さわの道玄が文化財の修復で社会に役立っている会社なら、その姉妹事業として、圓塾は文化財の保存にとどまらず、活用して、社会を豊かにする目標を掲げて出発いたしました。

これまで圓塾は「文化財探訪」という形で活動してきました。勿論この路線は今後も澤野ともえが中心に続けていきますが、更なる展開として、先人が残してくれた文化及び文化財のエッセンスを利用、応用することによって、文化・文化財が放つ「文化浴効果」を日常生活の中に無理なく取り込み、多くの人に自らホスピタリティを甘受してもらえよう事業を展開したく思います。具体的な内容は、あらためてお伝えするとして、とにかく、栞さわの道玄と圓塾の独

自性を各々が明確にし、双方から文化について発信していくのが、本来の姉妹関係ではないかと思えます。私個人の立場から申しますと、年齢も定年の域を超え、一昨年十二月末に栞さわの道玄の役員を退任しましたので、ここいらで栞さわの道玄の立場から圓塾を看るのではなく、圓塾事業に軸足を置いて、これまでの人生の経験則を活かし、我々が圓塾で描いてきた理想を現実を生み出していくと決めました。圓塾を新たな事業体に発展させるためにも、遅まきながら、ラストチャンスの起業スタートを切りたく思います。

文化財や文化は一握の人の興味の対象であってはなりません。大衆の心の中に豊かな精神状況を育ませるのが文化財や文化自体が有する「文化力」だと思えます。多くの文化財が万人に等しく散り続けているホスピタリティを、無理なく、ありのままに享受できる機会の創出が、自分の余生に託されたテーマと受け止め、圓塾の新しい事業に邁進するところです。

田中久雄

圓塾のあるる講座

このたび長らくご愛顧いただきました圓塾さあくる講座を、来年度(二〇一五年四月)より閉じることとなりました。誠に申し訳ない限りで、言葉に窮するところでありませう。振り返りますと圓塾も、円熟も、今もって難しいものどつくづく思えます。これまででない観光案内をと、勇んで企画はしてみたものの、どれだけ得心していただけたものかと考え込むのが常でした。古稀を迎えるに及んでも、未だに私は斯くの如しであります。円熟とは無縁な男が圓塾を企画していたのでしょうか。

けれども皆様と共に東奔西走した数々の思い出は、私の脳裡に化石のように刻まれています。今では整理がつかなくなった、その化石たちは何も語ろうとはしないのですが、確かに私の一部になって息づいているのです。これからは年一度か二度くらいにして、充実したものをと意気込んでおります。私の人生の晩節にあたり、伝統文化の中で育まれてきた自己に、さらに鞭打って新たな展開を目指し、皆様や伝統文化に恩返しを思っています。

気まぐれになるかも知りませんが、是非期待されずにお待ち下さい。ほんとうに長い間、圓塾さあくる講座にお付き合い賜りまして、有難うございました。心より厚く御礼申し上げます。

栞さわの道玄の展覧

私が文化財修理に従事して四十五年になります。何もわからない道を、日本のご先祖様のお蔭でなんとか手探りながらも、歩んでこられたような気がいたします。私はこれを奇跡と思いい、ただただ感謝礼拝する毎日なのです。

弊社は老舗の多い業界の中でいつの間にか背伸びをしてなりふり構わずに参りましたが、昨今、あるがままの自然体の会社に変りました。それは弊社の得意とする分野が定まり、技術力に自信が持てるようになった故でしょう。また、日本のご先祖様を絶対的な顧客とする姿勢が、全従業員に芽生えてきたことによるでしょう。

今や文化財修理の中核企業としてその使命を果たすことが、弊社の行方であり展望です。宿願の平等院鳳凰堂修理を果たし、これから十余年にわたる日本仏教の母なる比叡山、根本中堂の修理に向けて社員一同研鑽を積み、精進いたしますので宜しくご鞭撻のほどお願い申し上げます。

澤野道玄